
ラストクロース

藤城カロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラストクロース

【Nコード】

N5115Z

【作者名】

藤城カク

【あらすじ】

人類が最強ではなくなったとある未来の話。

軍人と魔人、そして軍人と魔神の熾烈な争いが続く時代。

世界に散らばる、不思議な力を持つ「神器」を巡ってその戦いは加速する。

血にまみれた戦乱の世に、様々な人々の気持ちが交錯していく。

残酷描写ありのファンタジーです

プロローグ

西暦2×××年。

人類が最高の霊長類として君臨していたといわれる時代からもう久しくなっていた。

人々は、いつしか現れた自分たちよりも遙かに大きな力を持った存在、「魔人」に恐れを抱き怯えながら生きていた。

しかしそんな魔人に抗うべく、軍隊を作り武器を取って戦う者たちもいた。

藍沢 隼^{ハヤ}は軍の者となつて4年。今では1部隊の隊長として3人の部下を引き連れ、魔人と戦う日々を送る。

そんな殺伐とした毎日の中にも、喜びや幸せを感じ、軍人としての気高い誇りを胸に抱く。

また、軍の中でも殊更実力を持つ彼は、特別な任務を与えられていた。

それは、魔人を統率する組織「魔神^{まがみ}」を滅亡させること。

悪の根源を潰さない限り、この戦いに終わりはない。

先に終わるのは魔人か人間か、漠然とした不安と一縷の望みをかけて彼らは戦地へと赴く。

しかしながら、彼らを待ち受けていた現実はそれだけに留まらなかった。

軍に反感を抱く一部の民衆や、軍の関係者までもが彼らに牙を向け襲い掛かる。

戦い続ける日々の中に、様々な人々の想いや信念が交錯していく。

モノローグ

どうせもう世界は終わりに近づいている。

私たちがこうして戦うのは少しでも生き長らえていたいから。

一瞬でも

一刻でも

いつか、少女がそう言った。

思えばいつから世界はこんなになったんだろう。

俺が生を受けるずっと前から、ここは混沌としていた。

かつてはどの生物よりも優れていた人間は、いつの間にかその地位を奪われていた。

人間よりもずっとずっと、力を持った生物に。

人間はいつしかそれを魔人と呼び、ひどく恐れた。

しかし、恐れるだけではいけないことに誰かが気付いた。

自分たちを支配する彼らに抗う為に、知力だけが優れていた人間はついに武器を手にした。

武力を持って平を成そうとする世界がまたやって来た。

この国にはひとつの軍組織を作り、それを四つに分けて各地に設置した。

俺は軍人になった。

これまでもこれからも人間と魔人は戦い続ける。

終わりがなさそうで、いつかは終わる戦い。

どちらかが降伏するか。

どちらかが滅びるか。

人はなぜ戦うのか。

これまで地上を制覇していた生物として再び君臨する為か。
生物の一種としてこの世界で生き延び続ける為か。

たぶん答えはない。

この世界に正しいものなんて何ひとつない。

第1章 はじまりの宴

辺りはすっかり夕暮れ時になっていた。

木々の葉が風に擦れる音が静かに耳に触れる。

さらさらした土の感触を踏みしめながら、黒いロープを纏った青年が小石や草を蹴り進んでいた。

金色に近い長い髪に、鋭い目付き、高い鼻。2メートルはあろうかというその体が威圧感を放つ。

彼は気付けば山に上っていた。軟らかだった土はいつのまにか刺々しい岩肌が変わっている。

「…完全に迷ったな、マジ」

雲をかすめる山の上を見上げ、彼はひとり呟いた。

見上げれば見上げるほど、岩肌は鋭く急斜面が続いている。

「……戦闘中あいつらとはぐれるなんて初めてだな……くそ」

長く延びた爪で彼は自分の頭をかきむしった。

靴を履かない足はすっかり土にまみれ汚れていた。

「……………仕方ねえ」

足首をこきつと回し、彼は一気に加速した。

やがて見えてきた山の頂きに、歯を食い縛り飛び乗った。

そこは開けた台地だった。前方に痩せた木が一本立っている以外何も無い、殺風景な場所。

彼は砂煙にまみれた頬を黒衣の長い袖で荒く拭った。

ふと、何かの気配がする。

「……………何処だ？」

嫌に禍々しく、邪悪な気配。

単なる魔人の持つそれとは明らかに違う雰囲気、彼は神経を尖らせ辺りを窺った。

ふいに、風に紛れて何かを着地する音がした。

正面の細い木の根元、薄紫色の空を背景にして誰かが立っている。

女だった。

それもまだ、年端もゆかぬ少女。

高く束ねた金色の髪に、ところどころ解れた麻を胸と腰に纏っている。

女は彼を見るなり笑顔を浮かべた。

「君がー…アイザワハヤ？」

「……………俺を知ってるのか」「知ってるよ」

女の言葉が聞こえたかと思うと、刹那にその姿は彼の前から消えた。

次の瞬間、彼の首もとを可愛らしい声が掠めた。

「君、鈍いんだね。この山を登ってきたからには機動力はそれなりにありそうだけど」

涼しい顔をした女が、彼の真後ろ、山肌ギリギリの位置にその露出した華奢な脚を留めていた。

「…お前何者だ？何で俺を知ってる」

彼は睨むように女を見た。その視線には少なからず少女に対する動揺が潜んでいる。

「……ふ、はは、……あっはっはっはっはっ！いやー、嫌だねえ、兄さんにそんな顔されちゃあなんだか拍子抜けじゃないか！」

女は実に愉快そうに細い体軀をくねらせて笑う。

「こんな年下のガキに威圧感でも覚えたー？あはははははっ」

膝に掌を打ち付けながら笑い続ける彼女に、彼はぎゅっと唇を噛み締めた。

「怖がらなくていいよ、今は何もしないから、今は」

「……お前、人間か？それとも魔人か？」

「残念だけどそのどっちでもないよ」

足元の小石を裸足で転がしながら、女は軽やかな口調で言う。

「…私は、…そうだな、その魔人共を統制している管理者の1人と
いっておこうか」

「…まさかお前…」

思わず彼の体が一步後ろに退いた。
反面、右の拳には力が入り青い血管が植物の枝のように浮き出ている。

それを見て女は鼻で笑う。

「正義感が強いんだかチキンなんだか……やれやれ。…あ、ねえこれ知ってる？」

女が口元を嫌らしく緩ませ、麻で包んだ胸元からおもむろに何かを取り出した。
彼は目を凝らす。

細い銀の鎖に通された、滴型の赤い宝石のようなものだった。

「何だそれ、玩具か？」

「この価値がわからないうちは君を不憫に思うしかないね」

今にも千切れそうな繊細な鎖を摘まんで、女は彼の前でゆらゆら動かす。

濁った血のような色をした振り子が彼の眼球に鋭く輝く。
目眩すら感じるような心地の悪い色合いだった。

「…まだ君が知らないしくみってやつがこの世界にはたくさんあるってことだ。……まあいざれ君たちは、これが喉から手が出るほど欲しくなるよ」

彼が瞳を擦っていると、女はゆっくりと宝石を自分の胸の中に戻した。

「…君たちと、私たちがこれらを奪い合う」

「…何だと？」

「あー、…少し話すぎたかな。それじゃ、近いうちにまた会えることを楽しみにしてるよ」

女は年相応のあどけない笑みを浮かべて、そのまま真上に高く飛び上がった。

白く小さな閃光に包まれ、瞬時でその姿を消した。

「…何なんだよ、君たち、私たちって…誰なんだよ、あいつ……」

彼は少女の溶けた闇空を見つめ、しばらく立ち尽くしていた。

目の奥に赤い残像が写る。疑問だけが思考の中を駆け巡る。

「…とにかくあいつらを探さねえと」

身を裂くような凍てつく風が勢いを増して彼に吹き付けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5115z/>

ラストクロース

2011年12月17日11時51分発行